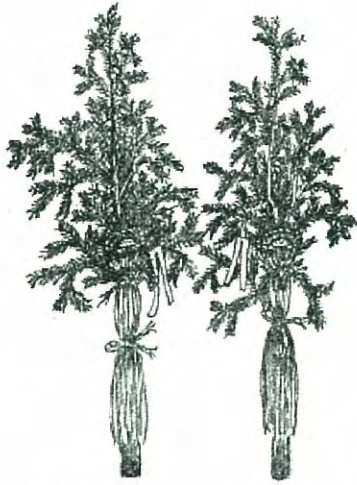


歴博 くらしの植物苑だより

第94回くらしの植物苑観察会 11月25日(土)
針葉樹のはなし 齋木健一(千葉県立中央博物館)

クリスマスツリー と 門松



「年中行事図説」に描かれている
長野の門松。場所と枝振りからマツ
ではなくトウヒであると推定できる。

クリスマスツリーにも門松にも、針葉樹が使われます。クリスマスにモミ、ヒイラギ、ヤドリギなどの常緑樹がかざられるのは、ローマ時代の農耕の神サトゥルヌスの祭り、サトゥルナーリア祭に直接の起源を持っているといわれています。太陽の光が最も弱まる冬至ごろに、太陽を元気づけ、地中の種に真冬でも生命がいき続けていることを示すために、常緑樹を飾ったのだそうです。一方、門松の歴史も古く、中国の唐王朝にまでさかのぼるとも言われています。日本には平安時代に導入されたようで、平安の王朝貴族たちも飾り付けをしたと言われていました。東洋、西洋とも、他の樹木が葉を落とす冬にも青々としている針葉樹が好ましく映ったのでしょう。

さて、クリスマスツリーにはモミ、門松にはマツが使われるとされていますが、本当にそうでしょうか？調べてみるとかならずしもそうではないことがわかります。針葉樹の仲間は一般に区別が難しいので洋の東西を問わず、名前に混乱が見られます。英米ではモミ属、トウヒ属、マツ属などは、まとめて Fir と呼ばれてきました。英米文学植物民俗誌によれば、Fir は特定の樹種を指す言葉ではなく、マツ属の Scotch fir (*Pinus sylvestris*), トウヒ属の spruce fir (*Picea abies*), モミ属の Silver fir (*Abies alba*), トガサワラ属の Douglas fir (*pseudotsuga taxifolia*)などが Fir と呼ばれているようです。同民俗誌によれば、「これらのうち、クリスマスツリーに用いられたのは主に *Picea abies* (ドイツトウヒ) のようである。」とあります。ドイツの有名な針葉樹林、シュバルツバルトの主な針葉樹はこのドイツトウヒですから、この説には説得力があります。ただし、これでは説明できない部分もあります。もみの木、もみの木、という歌のもとの歌詞は O Tannenbaum O Tannenbaum ですが、ドイツ語では

Tanne は *Abies* つまりモミ属でドイツトウヒの属するトウヒ属はドイツ語では *Fichte* となるのです。さらにいえば、植物学者もはじめは混乱していたようでドイツトウヒの学名 *Picea abies* をよく見ると、種小名はモミの属名と同じです。逆に ヨーロッパモミ *Abies alba* はかつては *Abies picea* という学名でも呼ばれていたそうです。さて、日本に入ってきた時にさらに混乱に拍車がかかります。翻訳のもとになった辞書で、*Fir* をモミ、としたので、トウヒ属もモミ属も、すべてモミと訳されてしまったのです。

日本に目を転じてみますと、「針葉樹ならスギかマツと名付ける」という傾向が多分に見受けられます。エゾマツ（トウヒ属）、カラムツ（カラムツ属）ブラジルマツ（ナンヨウスギ科）、ヒマラヤスギ（ヒマラヤスギ属）。門松に使われている樹種も、過去の記録から見て、マツの他、モミやトウヒの仲間もずいぶん使われていたようです。

次回予告

○第95回くらしの植物苑観察会

2007年1月27日（土）「水田と焼畑」 西谷 大（国立歴史民俗博物館）

13:30～15:30（予定） 苑内休憩所集合 申込不要 要入苑料

○第11回日本の植物文化を語る

2006年12月16日（土）「花木文化の粹—ツバキとサザンカの世界—」

箱田 直紀（恵泉女学園大学）

13:30～15:30（予定） 本館講堂 申込不要 聴講無料